

# ラバウル航空隊で 不時着をした体験

●高円寺北二丁目

内田 和喜知

(大正一〇年生まれ)

私は昭和一七年二月一七日、久里浜通信学校第六一期普電を卒業と同時に、鈴鹿海軍航空隊飛行術(偵察)臨時講習員として、三か月間の機上訓練を受け、昭和一八年三月一日、飛行練習生教程を卒業しました。そして直ちにラバウル航空基地の七〇二航空隊に配属を命ぜられました。

ラバウルに進出して間もなく、ポートモレスビーを戦爆連合の大編隊で、爆撃に初参加を致しましたが、それも一回だけでその後は敵グラマン戦闘機隊の大幅戦力増大のため、昼間攻撃の犠牲を少なくするために、爆撃や雷撃は薄暮か黎明の攻撃となりました。そして最も多かった搭乗任務は、昼間の索敵・哨戒と、そしてガダルカナル及びポートモレスビーの夜間爆撃でした。

最も印象に残っているのは、昭和一八年八月一五日ベララベラ島沖に敵空母を含む、機動部隊を発見したので、これに対して夜間雷撃の命令を受け、第一次攻撃隊六機の中の一機として、私のペアも出撃する事になりました。魚雷攻撃は約半数が落される白兵戦であり、生も死も神様まかせと覚悟を決めて、僚機とともにブナカナウ基地を一九時三〇分勇躍発

進した。ソロモン群島に沿って飛行する事約二時間三〇分、ようやく戦場に到着した。私は機長の指示に従って空二号電信器から離れて、左窓の七ミリ七機関銃の戦闘配置についた。海面すれすれを全速力で魚雷攻撃の進路に入った。左側銃座からは正面の敵艦が確認出来ないのは残念ではあるが、愛機が敵艦を求めて一直線に肉迫している事が緊迫した空気で分かる。そして一トンの魚雷が発射された。一瞬、機体が軽くなってフワッと浮くと思ったのも、つかの間、敵艦のマストそして艦橋が流れるようにせまる。そして敵艦からは機関銃や高角砲が一斉に火を吐き出した。一分間に六〇〇発も打ち上げるそうだからすさまじい。ド、ドーン、バリバリ、ガン、ガチャン何とも異様な音でした。私も夢中で七ミリ七の機関銃を打ちまくった。ほんの一瞬の出来事が永い時間のように思われました。

間もなく戦場を離脱したが、我が愛機も火災こそ起こさなかったが、何十発もの敵弾を燃料タンクに受けたため、燃料が漏れて遂に飛行不能となり、不時着をする事になった。

私は手や足の一本や二本負傷したとしてもたいした事では

ないが、人間頭をやられたらもうおしまいと、いつか聞いた話を思い出して、電信室の腰掛けのクッションで頭を守るようにして一秒、二秒と着水時の衝撃を待った。やがてガチャガチャと衝撃音とともに、海水がドーと機内に入り、「冷たい」、助かったと我にかえて、いそいで天蓋を開いて翼上に出る。負傷者は一人もなく八名全員無事を喜び合った。

一晩たって、気がついて見ると、右の方にも左の方にも現地の人が三〇メートル位の距離をおいて、我々を見守っている。何とか仲よくしようと思つて、一〇メートル近づけば一〇メートル退くので、どうしても話し合いの出来る距離まで近づくことが出来ない。昨夜私たちの飛行機が海に落ちたことは知っているらしいが、こわがつて近づこうとしない。そして九時ごろ、味方の一式陸上攻撃機の搜索機が近づいて来た。昨夜の私の打った電報が届いての救出と思う。やがて海岸線沿いにこちらに近づいた。そしてすぐに我々八名を発見して大きくバンクをしたので、思わずカン声を上げた。そして何回も旋回を繰り返しながら通信筒を落とす。手拭の先にゴムまりを包んだような、通信筒が何回も落された。そのたび毎にいつの間にか肌の色の黒い現地の人が大喜びで、海中やジャングルの森に落ちた通信筒を私たちのために拾つて来る。彼等は木登りも上手だが、海を泳ぐことも大変上手である。救助機よりの通信文は死傷者の有無と、不時着地点、また食糧投下の是否等であった。この搜索機が縁となり、現地の人と大変仲よくなる事が出来た。

この部落の中では一番高い建物で、きっとこの部落では貴

賓室の役目をしているような一〇坪程の所に案内をされた。ひとりの男が出て来て挨拶をした。言葉は判からないが敵意の無い事、むしろ好意を持っている事がすぐに理解出来た。貴賓室といつても、床は丸木をびっしりとならべただけで、フトンも毛布もあるわけではなく、飛行服を着たまま横になる。初めはゴツゴツして何とも寝れなかったが、夜間雷撃以来のつかれが出て一同ぐっすり眠る。そしてチャキノット岬にて救出を待つ事二日、ラバウル基地より九七水艇により救出して頂きました。

その後、昭和一八年一月一八日、私のペアは第三次ブウーゲンビル島沖海戦に魚雷攻撃機として参加し、敵艦に体当たりして自爆したのでペアの全員が名譽の戦死を致しました。私一人が不覚にもその時マラリヤで四〇度の高熱で寝ておりましたので、参加することが出来ず、未だに命を永らえております。

人間は生きようとして生き残れるものでもなく、死のうとして死ねるものでもないと思います。今日があるということ、は、いろいろな配慮によつて生かされている存在であるといわれております。しかし二〇歳前後で国のため、尊い生命を捧げた大勢の戦友を思う時に、生き残った者として、私には戦死をした人の分まで、世のため、人様のため果さなければならぬ人間としての使命があるのだと思います。その使命感を再確認するためにも、戦争体験を後世に語り継ぎたいと思います。

# 昭和二〇年三月一〇日前後の 学徒兵

●和田一丁目

大浦 章郎

(大正一三年生まれ)

昭和二〇年三月九日夜、就寝してしばらくして非常呼集のラッパが鳴った。あわてて営庭に整列した。

私が学徒出身の特別甲種幹部候補生として四街道の陸軍野戦砲兵学校に入校(隊)したのは、松の内を過ぎて間もなくであった。激しい訓練の毎日であったが、もう一週間もすれば初めての家族面会日がやって来るのを楽しみに、厳しい軍隊生活にも耐えていた。

つい一週間前、非常呼集が続けて二度あった。二度とも点呼がなくベッドに戻った。程なく三度目のラッパが鳴りひびいた。用もないのにこの野郎、と思った。どうせ点呼をとらないだろう。戦友に「俺は出ないよ」と言っつてベッドに残っていた。はかない抵抗である。が、今度に限って点呼をとった。週番将校がやって来て営庭に引きずり出された。散々なぐられた上、長さ一五メートル、胸までつかる防火用水を歩けと言う。ふんどし一枚で恐る恐る飛び込む。薄氷が張っている。先日も何かの罰である兵が飛び込まされ、心臓麻痺で死んでいる。ゆっくり歩ききった。だからその夜はまたそんな

なことをしたら今度は死が待っているかも知れず、二度の命令違反でどんなことになるか判らない。率先して飛び出し整列した。

これから徒步行進で靖国神社に向かうと言う。そういえば明日は三月一〇日、陸軍記念日である。私たちは肅々と行進し、市川方面に向かった。三か月ぶりに東京の街に出るとて胸が躍った。初めての面会日まで一切の外出が禁止されていながら。船橋にさしかかった時、東京方面の空が真赤に見える。やがて先頭の方から、東京がB 29の大集団に空襲されているとの情報が伝わって来た。それでも中山を過ぎ本八幡近くまで歩く。もう空はその辺まで紅々として来ている。

江戸川、隅田川にかかる橋という橋は死人で一杯。とても渡れない。省線も無論不通。下町一帯は大混乱の極。靖国神社参拝は中止。再び今来た道を四街道まで引き返す。四街道に着いたころはもう空が明るみ始めた。でも船橋から眺めた東京方面の赤さとは違う。疲れ切った体をしばらく営内で仮眠。朝になって、下町方面全滅の報を聞く。私は覚悟した。

私の家は吾妻橋と言問橋の間、隅田川に面していた。父母と下の妹が住んでいた。でも不思議に涙が出ない。それからサイドカーで視察にゆく隊付き曹長に家の様子を見て来てくれるよう頼んだ。曹長は夕方帰隊した。

「吾妻橋の上も道路も隅田川も死体で埋っている。とてもお前の家の近くまでゆけやせん。あの一帯は全滅だ。気の毒だが、お前の家も駄目だろう。」

それでも涙は出ない。就寝ラッパが鳴ってベッドに入り、やっと涙がポタ／＼流れてきた。それでも何とか父母や妹は逃げられたんじゃないか。二十の一生を思い出しているよりも、どういう風にどういう方向に逃げたかを考えているうちにウトウトしてきて、間もなく起床ラッパが鳴った。一日である。

戦友たちは日本全国から集まっている。彼等の多くは、あと四日に迫った家族面会日のことを語り合っている。それまで三日にあげず届いていた母の手紙。明日か明後日位には着くかな。もし一四日までに何等の連絡もなかったら？ 考えないことにした。訓練に集中するよう努力した。面会日の前日まで手紙も葉書も、そして異変の連絡もなかった。親類からも何等の通知もない。かえって大丈夫だったのじゃないかと思いつく方向に心が走る。新聞は毎日読めたが、被害地の詳細はさっぱり。

遂に面会日、三月一五日がやって来た。晴れあがった好天気。家族が現れ始め、みんなは宮庭にたむろし、喜々とした

輪が増えて来た。遠隔地の出身で最初から面会人のない戦友たちも仲間に入り始めた。事情を知っている戦友が私を誘った。でも私は宮門近くに立って待った。駄目、いや必ず来る、頭の中でその思いが交錯しながら一時間。

やって来たんだ。やって来たんです。父母と下の妹が。私の眼から大粒の涙があふれ出る。耐えられない。でも飛びつくわけにはいかない兵の身分だ。

私の家の一角だけ焼け残ったそう。前の隅田川は湯のような熱さになり、上流から流れて来る死体で一杯だった。上の妹は翌日松戸の挺身隊先から軍のトラックでかけつけたが、吾妻橋の死体がかたづけられつつあって、橋の端にうず高く積まれているのを見たという。

この日のための御馳走物資も焼けなかったと両手一杯の荷物から重箱その他とり出す。そのうまかったこと。私も面会人の無い戦友を呼び、舌つづみをうった。父はその日前後の眼に映った惨状を語ったが私は上の空。

それから五〇年近く、嬉しいこと、楽しいことはいくらもあつたが、この日ほどのそれは無い。またそれ以後、何があつても涙を流さないよう決意した。

# 軍隊での生活

●堀ノ内三丁目

大久保 吉明

(大正一四年生まれ)

敗色はいよいよ切迫し、周囲の友も予科練や特幹に志願して幼なじみは次第に消えてゆく。昭和一九年の暮れに私も一年早く徴兵され、浜松の飛行隊に入隊した。当時を思い出しながら書いてみよう。

それは前日銀座方面が空襲され多大な被害があった。その翌日は入営の日どうして手に入れたのか、好物のおほぎを母が祝いの膳につけてくれた。食糧も事欠く毎日なのに、床下に掘った防空壕の中で頂く。父母姉私の四人家族ささやかな楽しい家庭だったが、今日限りか何かひしひしと崩れる予感が、しけた壕内に感じられた。無理の話とも思ったが、早急に郷里の長野へ疎開するよう迫った。父も姉も軍需工場の要員で現場徴用の身、まったく自由を束縛されて疲れたその姿が目に残る。さあ鹿島立ち、けれど姉の姿が見えず、やさしい姉は耐え切れずどこかで泣いているのだろう。品川駅は壮丁と見送りで一杯、打ち振る旗に父母の顔が重なり潤んだ目には、ただ白地に赤がちらちらして判からなかった。窓を離れて涙を拭いた。着いた浜松は落ちついた昔の面影を残した

松の多い町であった。

ここで軍隊生活を書いてみよう。一夜を旅館で過ごし、あけて衛門に入る私物はこの奉公袋のみ。各班に分れ古兵に紹介され、全部新品の軍装を支給され、氏名がなにか目新しく映り、寝台の藁布団には毛布が折り目正しく重ねてあった。九九式の歩兵銃に初めて触れてみる。私の両側は古兵で、地方の兄と言う感じだった。民間ではこのころはすべて不足なのに、編上靴、食器、襟の一つ星それに真白のご飯、全国から徴集された私たちは方言も面白く、その中を古兵が食事から片付け、寝具の敷きかたまでやってくれる。三日目の夜お酒に紅白の饅頭がでる。タバコの煙に咽びつつ茶碗を叩いて歌う者、のろけて笑う者まさに天国。班長は若い軍曹で、隣りの古兵は星二つ左袖には赤と金の章が並ぶ。衛生兵を含めて七人、残りは新兵二〇人位だった。

無礼講の夜も終わる。翌朝何が何だか怒声に追い立てられ営舎前に整列した。ピントの雨。あの紅白の饅頭を食うと軍人になったそうで、今日からは毎日が地獄の日々になってし

まった。一期の検閲まで続くのだろう。古兵は関東軍の転属兵だから気合いのかかったこと。すべてが上官の命であるから反抗などしようものなら命取り。起床ラッパで起こされて、隣の古兵の床上げ、服を来て脚絆きゃはん巻き舎前に整列、点呼。遅いぞと怒声あび、一人でも気に入らぬと新兵全員ピントの雨。訓練教育内務そして私物から着いた手紙まで監視されての毎日のピンタ。叩く手が痛いと思え、革のスリッパ、地下足袋、巻脚絆で叩きのめす。戦友はメガネは割れ、又私は奥歯が欠け又失禁した友もあった。

そのころは空襲も激しくなり、警報がでると飛竜や呑竜は何れかに飛び去る。グラマンは機銃音を残し頭上に旋回、戦死者もで始めた。三方が原へ火葬の使役に行くこともあった。哀れは遺骨引き取りの家族が共に散華さんげしたこともあった。タコ壺に退避の時は最高の休み。古兵いないし茶畑の香りが漂い、高く行くB29の機影を追うて、虚脱したように一時の疲れを取る。そのころのある夜激しく隣の戦友が私を起こした。油汗がじつとりと浮いて夢での私が我家への外泊である。両親が門口で迎えている。駆けて行くと無言で玄関に消えてしまった。それだけの夢であったが、二、三日後に解体作業で初めて町に中隊で行く。何と広々焼け野原、あの美しい家並みは瓦礫がれきと化し、人々は目的もなくさまよっていた。その時突然空襲された。もうもうと前後も判らぬ煙の中で起き上がる。戦友がいない。今度は持参の鳶口とびくちで火を潜り探し始めた。絶望と疲れで悄然しんげんとして部隊に帰る。

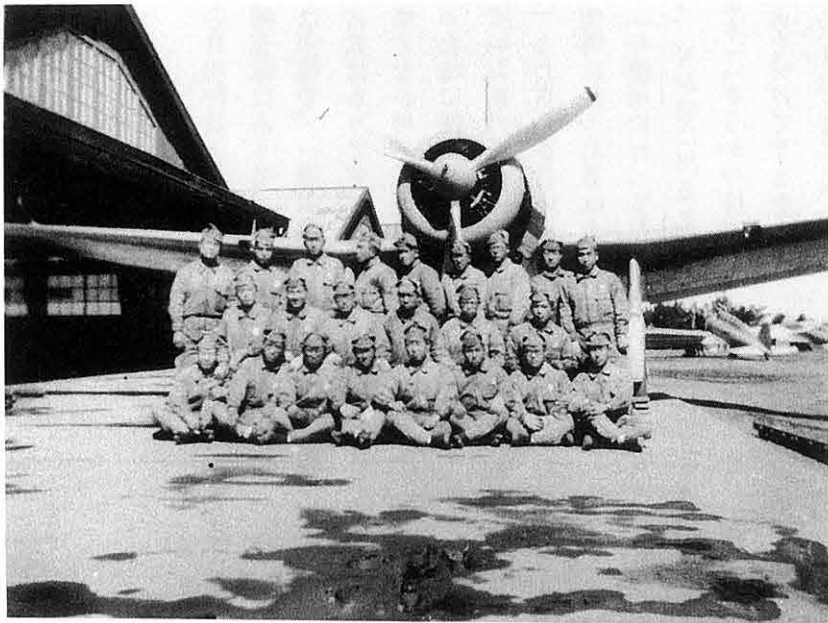
その途中で川崎の従兄弟に会う。面会に来てくれたのだ。瘦せてスフの国民服もよれよれ。炒豆が差し入れだった。その時父母と姉の死を知らされた暗然たる気持ち。聞けば亀戸駅近くでは一家全滅は数知れず、助かるのが不思議との話。すべてに麻痺した今の身には涙も枯れ他人事のように。でもあの夜の夢は知らせであったのか。姉さん熱かつたらうね、父母もきつと一瞬は私を思ってくれたに違いない。劫火ごうかに骨も散る、ああ何たるこの無惨。それから兵隊ヤクザ。何も恐れるものはなし。グラマンも上官も、への河童。その後横浜の空襲で家族を亡くした兵隊が脱走したが、捕まり衛兵所の独房に居たつけ。五月に水戸に転属、のりかえ駅の上野で戦災孤児にすばやく弁当を盗まれたこの時は泣けたよ、涙を拭いても拭いても。

上野から見る一面の焼け跡、吐き気するようなキナ臭さ。遠く遠く見渡せば、あれが亀戸方向か。待つ人もいないのに行けば会えるかと心が騒ぐ。水戸の先のおおみか駅に夕刻着いた。海沿いのゴルフ場で半地下の兵舎、芝生が屋根まで続き戦争は忘れたような毎日。白い御飯塩茹での鯖さばが一匹、けれど連日の壕掘りには足りなかった。夏の暑い夜、空も割れるような轟音がした。不気味な音が頭上をかすめる艦砲射撃だった。海辺の人々がやがて、大八車に世帯道具と子供を乗せて泣きながら山に登って来た。我が兵隊も続いて登る。突然海を見おろすその地に、錆びついた明治製の臼砲きゅうほうが空しくあった。そして日立工場が壊滅した。

そのころか軍の通信機でポツダム宣言は知ったが、決定的だったのは広島での新型爆弾投下を聞いた時だ。兵隊は壕掘りを止めた鶴嘴を壁面に打ち込んだまま、真夏の昼さがり雑音で判然としない終戦詔書をラジオで聞く。何を言ってるか負けたのだけは判った。移動歩哨だったので中隊本部に行く。既に将校の姿なし。机の引き出しを開けたら、水牛のパイプがころがった。雑然としていて空き家同様、当番に聞いたら、数日前にトラックで荷物と共に消えたとのことだった。その後は班長も古兵も新兵も、一律にした米、軍服、毛布を一杯に背負い、この軍隊を後にしたのは九月の初め。途中まだ手りゆう弾を投げる訓練をする隊もあった。ポロポロの満員列車に窓から荷物を押し込み総てサヨウナラ。並行してグラマンが翼をふって野面をかすめさった。



〈提供 尾形義三郎さん〉



東102部隊（昭和18年ごろ）

〈提供 前川重雄さん〉